

野上弥生子論

四二回生 一一号 亀井 美由紀

序論

私は弥生子とは同郷であり、小説の中に出てくる田舎の描写など故郷の白杵をモデルにしているのではないだろうかと思うことが多々あった。登場人物であるとか場面設定などは身近な所にモデルを見つけているのではないか思われた。特に初期の作品は写生文の筆致で描かれていて、私小説とも言えるだろう。しかしその後の作品をみていくと、時代を追うごとに弥生子独特の作風の小説へと移行してきていると思われる。この作風はどのようにして形成されていったのだろうか。弥生子は何に影響され、何を考え追求していったのだろうか。

弥生子の生きた明治から昭和の時代は、女性の地位・考え方が大きく変化した時期である。その時代には「女流作家」の果たす役割は大きかったであろう。女性だからこそ分かる感情、女性だからこそ書ける文、というものがあつ

たと思う。その中で弥生子は何を表していこうとしたのだろうか。

弥生子は長寿の作家である。そのため作品は小説・戯曲・随筆など多岐にわたりその数も多い。小説・戯曲について私なりに時代分類すると、初期は写生文に出發した時代、中期は社会問題を扱った時代、後期は一番の大作を手掛けた成熟した時代、晩期は作家として老成した時代となる。作品で見ると

初期……………「明暗」から「海神丸」まで

中期……………「海神丸」から「迷路」まで

後期……………「迷路」から「秀吉と利休」まで

晩期……………「秀吉と利休」以後

となる。

そこで第一章では弥生子の文学の基礎となる生い立ち、第二章では「縁」、「佛の座」など初期の作品の特徴や影響を与えたものについてみていきたい。第三章では「放火

殺人犯「海神丸」「腐れかけた家」「眞知子」「若い息子」などを執筆しながら自己の作風や思想を確立していった過程を考えたい。そして第四章では後期の大作「迷路」についてみてみたい。なお、本論では後期の「迷路」までを対象とする。

本論

第一章 生い立ち

第一節 臼杵時代

野上弥生子は、戸籍名を小手川ヤエといい、明治一八年五月六日、大分県北海部郡臼杵町（現在の臼杵市）に、父小手川角三郎（旧名常次郎）、母マサの長女として生まれた。生家は酒造業を営み、かなりの資産家であった。中庭や蔵は幼い弥生子の遊び場ともなったが、田舎の古い伝習や風俗の残る家だったようである。

明治二四年四月、六歳で臼杵尋常小学校に入学。明治二八年四月、一〇才で臼杵尋常高等小学校に入学。私塾で「源氏物語」などの日本の古典や、四書などの漢籍の講読をうけた。明治三二年三月、一四歳で臼杵尋常小学校を卒業、英語の学習をはじめた。

臼杵は小さな城下町でキリシタン文化の栄えた町である。一六世紀に領主大友宗麟により湾を見下ろす高台に臼杵城が築城された。宗麟が南蛮貿易を行いキリスト教の布教を許したことにより、臼杵は商工都市として繁栄を極めた。臼杵城は今はなく、その跡が公園になっているが、弥生子は幼い頃ここでよく遊んだという。

また臼杵は改進黨と自由党との政争が激しい土地で、小手川家は自由党の後援者であった。そのため選挙のたびに金銭が飛び交い、違反者が逮捕されていたようである。この様子を弥生子も目にしており、政治への興味を持つきっかけとなった。

弥生子はこのように臼杵の歴史や政治を、父角三郎から聞かされたり体験しながら育った。

第二節 明治女学校から「迷路」まで

高等小学校を終えると明治三三年一五歳で上京。本郷弥生町の叔父小手川豊次郎方に身を寄せた。知人の紹介で巖本善治のキリスト教主義の明治女学校普通科に入学した。

明治三六年四月卒業、高等科に進んだ。この女学校で学んだことは弥生子の考え方を養う上で、大きな役割を果たすことになった。

明治三八年同郷の野上豊一郎と結婚。豊一郎は上京して

夏目漱石の門下となる。そして漱石に進められて能楽を学び、後の能楽の学問的權威となる基盤が開かれた。このころがのちの弥生子にも大きな影響を及ぼす。

三九年明治女学校高等科を卒業。漱石のもとに出入りする豊一郎の話に触発されて習作「明暗」を書く。それについて漱石の批評を受ける。明治四〇年漱石の紹介で「縁」を『ホトトギス』に発表、文壇にデビューする。

私生活のほうでは明治四三年長男素一誕生、大正二年次男茂吉郎誕生、父小手川角次郎死去、大正四年叔父豊次郎死去、大正六年義父野上庄三郎・義母チヨ死去、大正七年三男耀三誕生、と出産と身内の死を次々に体験する。その間に「新しき命」「二人の小さいヴァガボンド」、戯曲「放火殺人犯」「海神丸」「準造とその兄弟」などを次々に発表。また長編「眞知子」の分載が始まる。そして昭和七年には「若い息子」を発表する。

この頃、弥生子は宮本百合子と文通を始めており、百合子はマルクス主義の方向に進み始めていた。社会的にもプロレタリア運動が盛んになっていた。このような中で、長編「迷路」を書いていくことになるのである。

第三節 「迷路」から死まで

「迷路」は弥生子の書いた最も長い小説である。昭和初

年の左翼運動の渦中に身を投じて弾き出された青年を主人公として描いている。昭和一年「黒い行列」として発表されたものが後改稿されて「迷路」第一部となった。昭和一二年「迷路」を発表した。しかし昭和六年の満州事変、昭和七年の上海事変と戦色が強まり、ついには日中戦争が始まり、表現の自由が危機に瀕する時代となっていた。主題が主眼だけに「迷路」を書き続けることが難しくなり、弥生子は「迷路」を一時中断し、日英交換教授として渡欧する夫豊一郎に同行した。約一年かけてヨーロッパを巡ったが、その旅行中の昭和一四年、ドイツがポーランドに進撃したことにより第二次世界大戦が勃発した。弥生子は異国の地で思わぬ戦争に巻き込まれ、戦争の激しい統制と混乱と惨状との一端を身を持って体験した。

帰国後の昭和一六年「山姥」を発表。同年母マサ死去。そして日本は太平洋戦争へと突入する。昭和一七年母の死をあつかった「名月」を発表。昭和一九年戦争が激しくなり北軽井沢の山荘で疎開生活を始め、五年間過ごす。

昭和二〇年敗戦を迎える。同年『山荘記』を発表。昭和二三年山荘生活から自宅へ戻る。敗戦により思想、言論の自由がもたらされ、中断を余儀なくされていた「迷路」を昭和二四年から再開、三一年に完結した。その間の昭和二五年豊一郎が死去。

昭和三七年「秀吉と利休」^(註15)を發表。昭和四七年のちの「森」^(註16)の一部を發表、五六年まで『新潮』に掲載された。「森」は弥生子が通った庚申塚時代の明治女学校を舞台に書かれた。昭和六〇年自宅にて老衰により死去。

第二章 初期の作品とその背景

第一節 写生文からの出発、漱石とのかかわり

まず弥生子の初期の作品を順に見ていくことにする。

結婚の翌年明治三九年、処女作の「明暗」^(註17)を書いた。夫の豊一郎が夏目漱石の門下であり、豊一郎は漱石をとりまく師弟との間に取り交わされる文学雑談を逐一弥生子に聞かせた。この話に触発された弥生子が書いたのが「明暗」である。これは両親を早くに亡くした仲のよい兄妹に起こる出来事を描いた作品である。

弥生子は直接の門下ではないが、豊一郎を通じて漱石の批評を受けた。

一非常に苦心の作なり。然し此苦心は局部の苦心なり。従つて苦心の割りに全體が引き立つ事なし。

一局部に苦心をし過ぎる結果散文中に無暗に詩的な形容を使う。然も入らぬ處へ無理矢理に使ふ。スキな

く象嵌を施したる文机の如し。全體の地は隠れて仕舞ふ。

一而して此裝飾は机の木とある點に於いて不調和なり。會話は全然寫眞にして地の文は殆んど漢文口調の如き堅苦しきものなり。(余の全體のあるものに似たり)

(中略)

一……人情ものをかく丈の手腕はなきなり。非人情ものをかく力量は充分あるなり。繪の如きもの、肖像の如きもの、美文的のものをかけば得所を發揮すると同時に弱點を露はすの不便を免がるゝを得べし。

以上は臼杵市にある野上弥生子文学記念館に現存する批評の手紙の一部であるが、その中で漱石は、弥生子の才能と苦心とを認め、精読し欠点を指摘し、具体的に親切に指導した。自分の文章に似たところがあるとも言っている。そして非人情のもの、繪のような肖像のようなものを書けばよいだろうと言っている。これは正岡子規が漱石に写生文を教えたのと同じように、漱石が弥生子に写生文を勧めているということではないだろうか。

「明暗」と同じころ、弥生子は「縁」^(註18)を書いた。若くし

て母を失った寿美子が祖母に母の嫁入りの時の話を聞き、父と亡き母の縁を思うと同時にいつしか自分にも誰かと縁が結ばれるであらう事を空想するという話である。これは漱石の推薦を受けて明治四〇年『ホトトギス』に載った。

漱石が「縁」を気に入った理由は、もちろん弥生子の才能を認めてということもあるだろう。しかし漱石が勧めた手法、つまり写生文の形態をとっているということも関係している。『明暗』批評での自分の助言を受け入れて書かれた作品であり好みの作風であったからこそ、親切に紹介したのではないだろうか。

前の小庭に当つて居た日影が先方の森にうつつて、一叢の白萩が暗くなる。森の間には本堂の棟瓦がその日影を反して水銀色に光る。その時びいゝとけたたましい鳴き声を立てゝ一羽の小鳥がとんで来た。何といふのか頬の赤い可愛い鳥である。木槿垣の上にそつととまるとその羽にふれた白い花が右にしなふ。

以上は「縁」からの引用であるが、風景をそのまま客観的に描写している。漱石の批評の「繪の如きもの、肖像の如きもの」を意識していたのではないだろうか。弥生子は少女時代から国文学の教養や英文学の見識を身につけていた

が、漱石に教えられて、写生文に出発したと言えるだろう。のちに弥生子は昭和一〇年発表の随筆「夏目先生の思ひ出」^(註四)の中ではこう述べている。

わたしはただその後もなにかできると見て頂いてゐた先生から、これでよいと云はれることが最上の名誉であり、満足であった。

また昭和四六年「私をもっとも影響を受けた小説」というアンケートには次のように答えている。

この世に生きるといふことがどういふものであるかを、若い幼稚な私にはじめて教へてくださったのは先生の作品であり、また八十六の老媪になり果てた今日において、いよいよ深くその一事をおもひ知らせてくださるのも先生の作品です。

弥生子は漱石を師と仰ぎ、漱石の文学を尊敬していたのである。このことから弥生子が漱石の文学を手本にしていたと考えられる。

この後、明治四〇年「七夕さま」^(註五)「佛の座」^(註六)等小品的な作品が続けて発表されたが、これらはすべて九州のある地

方を背景として、若い少女を描いたものである。いずれも意のままの結婚ができないなど、明治の子女が古い伝習や風俗に生きなければならぬ哀しみや恨みを写し出すところから出発している。この地方というのは、臼杵方言が用いられていることから見て故郷臼杵がモデルとなっていると考えられるし、弥生子の家自体も地方の古い習俗の残る家であった。実生活における体験に基づいて描かれていると考えてもよいだろう。このほかにも初期には、実生活に基づいている作品が多々ある。

まだ小説を書き始めたばかりの若い作者は身のまわりの事象や見聞をもとに、実生活に基づいた写生文を書いているのである。

第二節 写生文からの脱出の転機

明治四三年弥生子は「閑居」^(註2)を発表する。この作品では文体を少し変えている。

津瀬子は起き上がると庭から湯殿へ廻りました。而して瀬戸引きの大きな洗面器に冷水を波々とたゞへて、其中に顔を漬けました。次に髪をほぐした。而して屈めた上半身の前に黒く梳き下ろして束髪にした。

以上のように全文が常体と敬体との混交文で読みづらい。結局この文体はこの作品だけであったが、これは自分自身の文体を見つけようとしている努力の表れではないだろうか。

弥生子の作品が小説的な風格を持ち出したのは明治四四年発表の「父と三人の娘」^(註2)からであろう。

事業に失敗した父が、三人の娘と離れ離れになって暮らしている。東京にいる長女お信と横浜にいる次女玉子、そしてミッシヨンの女学校に通う三女元代が、父親を呼び寄せてしばらく皆で暮らすという話である。

この作品も写生的描写から始まっている。しかしそれだけの人物の性格がよく描き分けられていて立体的であり、今までの一人の人物を一人の視点から書いた私小説的写生文よりも小説味を帯びてきている感じを受ける。ただ単に出来事を客観的に述べているだけでなく、それぞれの女性の生き方進み方についても言及しているのである。たとえば長女お信はお人よしでまじめな性格、次女玉子は要領がよく世渡りも上手くせっかちな性格、三女元代はおとなしく健気な性格と描かれている。本文中では次のようである。

玉子はずくり栄えのした元代の美しい姿を、自分のものゝやうに嬉しさうに眺めながら思った

「少し気をつけてやればこんなになるものを……。」
お信は、元代がはじめは、何かと拒んでゐたが、とうとう諦めたやうに云ひなりになつてゐるのをいゝ事にして、玉子が好き勝手にいぢり廻してゐるのが何だか可愛想に思はれたが、そんな時口を入れるとまた五月蠅さいので、知らぬ顔をして茶の間の方にあると、「さあ姉さん見て頂戴、違つた人のやうになつたでせう。」

と玉子が一人ではしやぎ立つて呼んだ。元代は開けた窓の前に立つて、後から射す庭木の影をおびた明るい光線の中に、初めて咲いた花のやうにばつと色どられて見えた。

「私がこんな風をしたつて似合へばしないのに……。」
元代は困つた様な、それでも半分珍しい落ちつかぬ様子で、そつと鏡の中を覗いて見た。

三人それぞれの性格をよく表している箇所である。客観的に描写するだけでなく、人物にそれぞれの性質や役割を与えて始めているのである。そしてこのことは弥生子が写生文に出発しながら、独自の道を歩み始めていくことにつながっていく。

この時期に弥生子が写生文から脱する、作家としての転

機が訪れた理由としては、まず『青鞥』の人々との接触が挙げられるだろう。

明治四四年平塚らいてうを中心とする女性たちで『青鞥』が創刊された。近代思想に触れ新しい文学を模索する人々とかかわりながらも、弥生子は寄稿だけで運動に直接関係してはいない。進歩的な社会運動に好意的な関心を寄せつつ、客観的な態度を取っていたのである。しかしこのよう
な人々との接触は文学的にも変化を及ぼしたであろう。そして自分自身が高等教育を受けた女性としての考えもあつただろう。その結果「父親と三人の娘」の様な女性の生き方についての作品が出来上がっていったのではないだろうか。

また出産や身内の死も大きな影響を与えたと思われる。
明治四三年に長男素一を、大正二年に次男茂吉郎を出産する。この期間弥生子は、「新しき命」^{註28}、「二人のヴァガボンド」^{註29}「母親の通信」^{註30}などの母性的小説を次々に発表する。生という人間の根源にかかわる問題に直面し、母親の目が加わつたのである。と同時に生と反する死についてまでも考えが及んでおり、大正二年「死」^{註31}という作品を発表する。その中に主人公の考え方として次のように述べている。

信子はこんな親しい人達の死を知らせる手紙に接する

度に悲しいとか、可愛想だとかは思ふものゝ、胸のそこから湧き返るような涙は滅多に出て参りませんでした。

(中略)

生まれてから今日までまだ一度も人間の屍と云うものに目を触れた事のない信子には、余計に死と云ふものが創造のつかぬぼんやりしたものになりました。

この作品を發表した後すぐに、実父小手川角三郎が死去している。そして翌年叔父豊二郎、その翌年義父と義母が相次いで死去し、さらに師と仰ぐ漱石までもこの世を去るのである。今までぼんやりとしか考えたことのなかつた死に直面したのである。死についても考えざるを得なくなつただろう。このことも弥生子の作品の主題が深化していった一つの理由に挙げられるのである。

以上のように、弥生子の初期の作品は主に漱石の指導による写生文と母親の目から見た母性的小説との二群に分けられる。そして写生文から脱皮して自己の小説を書き始めることになる転機は、出産あるいは身内の死であると言えるのではないだろうか。人間の運命である二つの大きな出来事に遭遇した事によって人間の本質について考えるようになり、人間のうわべだけでなく性質にまで書き及んでいっ

たのではないのだろうか。

第三章 中期の作品とその背景

写生文を脱出し自分の道を確認し始めた弥生子は、今度は身の回りの出来事や見聞にヒントを得て、それを自分のものにし、深く掘り下げて小説にしていこうという方法をとつたのである。また社会的問題を主題にした作品も發表し始める。そこで中期の代表作について詳しくみていきたい。なお「放火殺人犯」は創作年代的には初期にあたるが、初期から中期へ移行していく段階の作品としてこの章で扱う。

第一節 「放火殺人犯」「海神丸」

～印象的な経験を小説の素材にした時代～

弥生子は大正初期から創作戯曲をみせ始める。明治末年から大正初期にかけて近代劇運動が起こつたことにより戯曲の制作が促されたのであろう。大正五年に戯曲「放火殺人犯」を發表する。

純真な青年が、尊敬する恩人が自分の恋人と関係があった事を知り、恩人を殺し、放火をして自殺するという内容である。

この戯曲の内容は、同じようなものがちに小説で發表されている。それは昭和一〇年發表の「悲しき真珠」であ

り、九州（白杵）も登場する。東京の上の学校へ進んだ女学生が、叔母の危篤を聞いて郷里（白杵）に帰ってくる。死後、叔母の遺品を整理しているときに見つけた手紙の内容が「放火殺人犯」と同じになっているのである。

「放火殺人犯」に描かれた悲劇は弥生子の見聞であると思われる。弥生子が上京後通った明治女学校は、弥生子が入学した時には、先進的な役割を終えて、巖本善治をめぐる良からぬ噂のある末期にあったが、この良からぬ噂というものが、「放火殺人犯」内容のモデルとなっていると思われるのである。そのモデルと思われる出来事を弥生子自身が述べているところが昭和一九年「作家に聴く」^(註五)の中にあつた。

わたしが高等科へ入るか入らないかの頃だったが、急に学校の様子がへんになり、巖本先生の道話もなくなると、第一、先生自身学校に見えなくなりました。

（中略）

おぎんさんから、あなた学校の出来事を知っているか、と訊かれた。なにも知らなかったが訊いてみると、奥さんの若松賤子さんを失って以来、独身で学校の森の家に住んでおられた巖本先生と一人の生徒との間に、当然起こることがついに起こっていたわけだ。ところ

がその生徒というのが、これも巖本先生の崇拜者の一人であつた大学生の愛人だったから、面倒なことになつた。その大学生は激怒して、同じく出入りしていた内村鑑三先生に報告する。内村さんもあの調子でカンカンに怒るところから、最後の破綻になつたのだつた。

また、明治女学校は、明治二九年校舎を火事で失い、まもなく巢鴨庚申塚に校舎を移している。このことから、「放火殺人犯」を書くことになつたきっかけはこの二つの事件であり、この事件が小説の設定の大枠となっていると思われる。心に深く残っていた見聞を素材に出来上がった作品と言えるだろう。

「海神丸」^(註五)は、ある冬、東九州の海岸町に近い漁村から、日向を目指して出かけた帆船が途中で暴風雨に遇い、ついに太平洋に追いやられて五〇日あまり漂流した。その間に食べ物がなくなくなり、それがもとで、船長とその甥、外二人いた船員が二派にわかれて睨み合った結果、他人の二人組がその肉を食べようとして船長の若い甥を殺した。しかし結局は食べることができずにアメリカの汽船に救助されて帰って来た、という内容である。

この作品もモデルとなる事件があつた。これは弥生子の

実家の小手川家に出入りする渡辺徳蔵という船乗りが遭遇した実話である。事件のことを耳にした弥生子は、弟に詳しい話を聞いてもらい、主要点を書き留めた記録をもとにしたのである。

このことについて弥生子は昭和四年『海神丸』のあとがきで次のように述べている。

本筋以外の附加はすべて私自身の空想である

そしてまた弥生子は四〇年ほど経った昭和三七年、随筆『海神丸』の中でこう述べている。

文学とライバシーの問題がさかんに論議されたころ、意欲さかな作家ならとくに書いたに違いなく、また十分書くに値する素材を多くもっているが、いまだに作品化しえないみずからの弱気がいまさらに顧みられた。

これは、それによってだれかのライバシーを傷つけるのをおそれるより、また理論的には許される、許されないの考慮より、そんな問題を生じさせる余地のないほど、いいかえれば、モデルの興味や好奇心をまったく失わせるくらい、渾然たる立派な芸術にまで仕あ

げる自信をもたないための逡巡で、けっきょく自分作家にはなれないのではないかと考えたりする。

(中略)

この私にもただ一つだけ純粹なモデル小説がある。それはもう何十年もまえに書いた『海神丸』で、むしろ実話小説とすべきであろう。

(中略)

あの中編はそれにもとづいたもので、私としては小説らしいものがやっと書けた最初の仕事かもしれない。

この作品はモデルとなる素材があり、その本筋以外の附加を弥生子自身が創作したことを述べている。弥生子は、モデルとなる素材があればそれを自分の力で面白い作品に仕上げ、モデルへの興味を失わせなければならぬと考えていた。そしてそれができてこそ作家であると考えていた。つまりこれが弥生子が目指そうとしたところであり、この作品は弥生子がそれに挑戦した作品であると言えるのではないだろうか。

以上二つの作品は、身近な印象に残った経験や見聞を素材にしなが、弥生子なりの考えを加えて出来上がっていったと考えられる。そしてモデルを用いながら、いかに自分の力でおもしろい内容にするかに、心を砕いていたのであ

ろう。

第二節 「腐れかけた家」から「若い息子」まで

思想問題を取りあげた時代

「腐れかけた家」は、東北の地主が主人公となっている。地主塚本圭一は妻竜子、妹芳子と山や田畑や古い家屋敷の残る田舎で暮らしている。しかし昔の繁栄は今はなく、家計は傾きかけ家は半分腐りかかっていた。という設定である。

地主と小作人という階級意識の問題も含まれた作品であるが、この作品も素材となる出来事があったのである。

大正の末年の夏、夫豊一郎が東北地方に講演旅行に出かけたのをきっかけに野上家は家族で十和田湖畔に過した。そしてその途中弥生子は友人の工藤哲子を訪ねる。この哲子は芳子のモデルとなっていると思われる。哲子は明治女学校の同窓であり、卒業後も交際を続けていた。哲子は女学校を卒業すると、従兄の騎兵将校と結婚した。九年目に夫が発狂し、看護して一〇年を暮らしたあと、夫が亡くなり自由の身になった。そのとたんに兄嫁が亡くなり、実兄も亡くなっていたので、残された幼児の養育と衰退している大主人の家の管理のために故郷に戻らなくてはならなくなつた。

哲子がモデルとなっている作品は「腐れかけた家」のほかにも初期にいくつかみられる。「林檎」には中佐婦人として描写されているし、「二人の学校友達の話」は「運命」では哲子自身が主人公であり、いずれも哲子の結婚や夫が狂ったことを中心に描かれている。狂人となった夫をずっと介護した哲子の話は小説の素材としてはおもしろいものである。しかし「腐れかけた家」は哲子の家の没落に焦点があてられている。哲子の家の実情、苦悩についてじかに接し、具体的に知り、強烈な印象を受けたのである。以前「死」の中で死をぼんやりとしたもの漠然としたものと述べていたが、それと同じように資本主義経済や地主と小作人の問題について抽象的にしか理解できていなかったものを、眼前に見たわけである。しかもそれが学生時代からの親友の家であったことが、より印象づけられる結果になったのではないだろうか。

大正末には無産階級運動やプロレタリア文学運動が盛んになり、弥生子も時代の要求に応じてマルクス経済学にも読書の範囲をひろげていた。若い学生や知識人が学生運動や社会運動に入っていく事態を深く憂慮し、同情をもって見守るようになっていたが、それはこの東北旅行で一段と深められたのではないだろうか。これを契機として労働問題、社会問題を時代とともに考える、特に若い人たちの思

想問題を積極的に取り上げる作品を書いていくのである。そして大正末から昭和にかけての学生運動に触れた小説「真知子」^(註)を発表するのである。

「真知子」の主人公曾根真知子は結婚問題をきっかけに自らの属する上流階級に嫌気がさし、そこからの脱出を図ろうとする。その機会の一つは友人大庭米子との親密な交際によるものである。米子は学校を退学すると革命運動に近づき、同じく革命運動に参加している関三郎と親しくなっていた。真知子はこの関に魅かれ、運動に参加することになるかもしれないと考えていたが、関の裏切りにより結局は上流階級の考古学者河井輝彦と結婚する。

よほど東北の哲子の家が印象が強烈であったものとみえ、哲子を、友人で東北の地主の娘大庭米子のモデルに用いている。しかし主人公真知子に関しては、特定のモデルはいないとされている。弥生子には男子が三人いたが女子はいなかったし、弥生子自身もモデルはいないと否定している。真知子が弥生子の完全な創作的人物であるとしてもその創作を刺激したものはあったであろう。

そのころの日本は日本共産党員や急進的な労働組合員の大量検挙が初めて行われて、階層闘争の血なまぐさい姿はつきりと現れてきた時代であった。社会的矛盾を感じた学生達の間から左翼運動へ飛び込んでいくものが続出して

いた。同じころ、女子大生を中心とした運動のメンバーが検挙されている。真知子と同じような疑問や考え方をもち、運動に走った若い女学生がすでにいたのである。幼いころから政治や社会情勢に興味をもっていった弥生子は、このことに通じていたのではないだろうか。

弥生子は宮本百合子とも交友があった。百合子とは手紙のやり取りで始まり、お互いの家も近かったことからだいに交友は深まっていた。時代の影響で百合子はプロレタリア文学運動に参加しのためり込んで行く。弥生子は昭和二九年「作家に聴く」の中で

私の対社会的意識を百合子さんの影響と見るものがあれば、それは間違いである。

と述べているが、直接影響を受けなかったにしても、心の底には対抗する意識があっただろう。弥生子は、真知子を運動に直接参加させず結局上流階級の間と結婚をするように描いている。これは百合子に対する弥生子自身の生き方を表しているのではないのだろうか。弥生子は社会問題を扱いながらも自らは上流階級の生活を捨てたわけでもなく、その運動に入っていくことはなかった。時代の動きや考え方に敏感でありながらも、実際には少し距離をおいて

眺めているという感じなのである。

また弥生子の身边にも変動の波は押し寄せている。長男素一が通っていた浦和の高等学校でも学生によるストライキが起こっているのである。

真知子は、こうした時代の動きや友人たちや息子との接触の間に形作られていったのであろう。真知子は、それが男であれ女であれ、その時代に生きていた若者であれば誰しもがもち得た感情や疑問であり、誰しもがなり得た人物であると言えるだろう。ここにおいて弥生子は作品の主題をその時代の社会問題や思想問題からとり、作品中でその時代に生きている人物の代弁をしていると言えるのではないだろうか。

昭和七年に発表した「若い息子」^(註)は「真知子」の男性版といえる作品である。

学生である工藤圭次は活動家の友人に誘われて読書会に数度参加する。仲間と一緒に検挙されるが、活動に深入りしてなかったことと有力者の口利きで圭次だけ軽い処分で済まされる。それに負い目を感じる圭次は、運動から身を引くように哀願する母親を説得して、友人たちの不当処分を取り消し運動の中心人物となっていく、という内容である。

長男の素一が通っていた高校でも学生運動が起こっていたことを考えれば、モデルは素一であると思われるが、こ

れに關しても弥生子は昭和八年発表の「私信」^(註)の中で次のように否定している。

あの息子は、決してわたしの真実の息子ではありません。

(中略)

高等学校や大学に入つてゐる子供らで、ものを真面目に考へることが出来るものなら、さうして自分たちの階級的立場について少しでも眼をさましかけたものなら、機会のあり次第誰でも「若い息子」になり得るのですから。

「真知子」のモデルについてもそうであったように、「若い息子」についても特定のモデルはいないとしている。その時代に生きる若者であったならば誰でもなり得る人物であると言うのである。しかし一人の人物がモデルであると特定できないとしても、自分の息子を含め身近にいた学生やそこに起こった出来事などが素材にはなっているのではないだろうか。そういうものをたくさん集めて作り出された人物が「若い息子」の主人公であると言えるだろう。

この期は若者の思想問題についての作品が多い。弥生子は運動に直接参加したわけではないが、社会問題としてそのことについて考え若者の代弁をしていたのではないだろ

うか。しかし、若者と同じ立場から考えているわけではなく、少し離れて客観的に見ているのである。その意味では、自分自身の考えを述べているとも言えるだろう。

第四章 「迷路」

「迷路」は、昭和十一年「黒い行列」を発表してから昭和三十一年最終章「方船の人」を発表するまで、完結に約二〇年かかった大作である。長編であるから登場人物が大勢いるが、ここでは主人公の菅野省三を中心に述べていきたい。

菅野省三は、九州南部の城下町由木町の醸造業者の次男である。社会運動に関係をもつが、転向後は遠縁の政治家垂水の配慮で旧藩主阿藤家の資料編纂員、阿藤の息子の家庭教師となる。垂水の娘多津枝とは幼なじみで、本音を話すことができ、転向問題さえなければ結婚したかもしれない間柄であった。郷里の兄が選挙違反で検挙されたことにより省三は故郷へ帰ることになる。帰郷後、菅野家と政敵である伊藤家の末弟の慎吾と知り合いになり、密かに交友を深める。そして大友宗麟以来の西教史の文化的研究に興味をもつようになり、その資金援助を同郷の財界人増井に頼む。多津枝が稲尾財閥の三男国彦と政略結婚をしたあと、省三は増井の姪で混血の万里子と結婚する。しかし大陸に

召集され脱走を図り、銃撃され倒れるのである。

この作品についても昭和十一年「黒い行列」附記の中でモデルはいないと否定している。

たゞ年のために特定のモデルとしては一人もないことを断っておきたい。

モデルがないと断っているのは「若い息子」と同じである。省三は「若い息子」の主人公の後身ともいえる人物である。確かに省三のモデルは特定の一人には絞ることはできないかもしれない。その世代を生きた青年なら誰しもなり得る人物であると述べている。しかし省三は、弥生子の分身であり、弥生子の考えを反映した人物とは言えないだろうか。

まず、省三の生い立ちである。九州南部の城下町由木町は弥生子の故郷白杵がモデルであると言える。作品中での由木町の風景の描写は

馬蹄型の入り江は透明な秋陽の下で、水平線のかなたの細長い四国路まで徒歩わたりされさうにすべすべと青かった。

(中略)

海は満潮であつた。さうして波がなく、左右の岬で黒く縁取られた湾は馬蹄なりの型いつばいにびつちり膨れ、青銀いろに輝いてゐた。

などとされている。一方臼杵についての描写は随筆の中にいくつも見られる。「ふるさと」^(註48)「南蛮の夢」^(註49)「叢林」^(註50)「ふるさと断章」^(註51)「キリシタン大名の古跡」などに描かれているが、その中でも「ふるさと断章」には

瀬戸内海から日向灘に出る出口の青い波のおだやかな入江

また「キリシタン大名の古跡」では

私の生まれた臼杵は、府内なる大分から急行だと十分とは離れていない。義鎮が宗麟となつて居城として丹生ヶ島は、青い馬蹄型の入江に臨んだ小さい半島

と描かれている。幼いころを過ごした臼杵の風景、特に海は、弥生子にとって忘れられない故郷の思い出ではなかつただろうか。

風景だけでなく、由木町が政争の激しい土地であつたこ

とも根柢の一つである。臼杵が政争が激しい土地であつたことは第一章でも述べた。幼いころから見聞きしていた政争や選挙についても描いているのである。「迷路」の中で町の政争について

泳ぐ場所さへ二つに分かれた町の生態

と表現した箇所がある。これは弥生子の息子たちが経験したことでもある。長男素一氏が「日暮里渡辺町の家」^(註52)の中で次のように述べている。

臼杵全体が政治的であつたが、僕自身の経験からもそれを実証できる。子供の頃だがある夏臼杵に帰り、臼杵湾で泳いでいると、知らぬ人がやってきてあなたの所は政友会だから政友会の入江で泳ぎなさい、ここは民政党の入江だから泳げないと云つたのでびつくりしたことがある。

この出来事を由木町の説明に使っているということは、やはり臼杵がモデルであることの裏付けになると同時に、臼杵の政争に対して強い印象を受けていたことの裏付けであるといえるであろう。

もう一つ由木町が南蛮文化の栄えた土地であると描かれている点も臼杵を踏まえているところである。省三は大夫宗麟の文化史的研究、西教史研究に興味をもっていく。そして故郷でその研究に取り組もうとするが、これは弥生子の夢でもあったのではないだろうか。前出の「南蛮の夢」の中で弥生子は次のように述べている。

彼の物語に強い興味を感じるのはピントオの上陸に依り、西欧の渡来人をはじめて日本の本土に迎え入れた歴史的の下アとなった臼杵が、私の故郷であるためである。

(中略)

臼杵の繁栄は——全然異国風な、南蛮趣味の華は、近代の日本の輸入文明の先駆をなした珍らかに不思議な光景であつたらう思ふ。

また「キリシタン大名の古跡」では次のようである。

田舎に生まれたものには、故郷に残る歴史は幼いころ聞かされたお伽話のようになつかしいものである。またそれと等しくただ面白半分^{面白半分}に耳にしていたことが、日本の文化史に甚大な関係があるのを知ることにつけ、い

ままでは違った興味に扱られる場合が珍しくない。キリシタン大名大夫宗麟への私の関心もその一例とされるかも知れない。

弥生子は臼杵が南蛮文化の受け入れ口となったことに対して大きな興味を持ち、そのころの繁栄していた臼杵に思いを馳せていたのであろう。そしてできることならその研究をしたいと思っていたのではないだろうか。だから作品中でその思いを省三に託し、実現させようとしたのではないだろうか。宗麟についての思い入れは強く、実家の酒の銘柄にも「宗麟」と名付けている程である。

省三の実家が醸造業であることも弥生子との共通点である。設定として自分と同じように醸造業を実家に持つ人物は以前にも「父親と三人の娘」^{三人の娘}などに見られる。醸造所の描写がとて詳しく描かれているのも幼いころの自分の経験を生かしているのである。

このように主人公の生い立ちに自分自身の生い立ちを重ね合わせていることを考えれば、弥生子にとって臼杵は切り離せない存在であったと言えるだろう。故郷臼杵は弥生子の作品に影響を与えているのである。

省三の思想の面についても弥生子の思想を反映していると思われる。それは反戦である。昭和二年「私の信条」

戦争に対する私の生理的に近い戦慄と恐怖も、母譲りのものらしい。

と述べているし、反戦の文章は他の随筆にも多く見られる。

「迷路」の中では省三の思想として

敵を狙つたはずの銃が、まさしくは黄を撃ち、その兄弟を撃ち、仲間を撃つに等しいこと

(中略)

いつたん負け戦となつた被侵入国の民衆が、どんな目に逢はなければならぬか。

(中略)

勝利は日本になにをもたらすだらう。今後の戦争がいろいろ誘因はあるにしろ、けつくファッショ化した軍閥の覇業であり、それに追隨した政治家、資本家の仕事である意味から、戦勝も彼らのみのものである

(中略)

こんな異常な、どちらともつかない戦ひに追ひこまれた兵士が、世界の歴史を通じていつか地上にあつたらうか。

と述べている。左翼運動に傾倒していった青年が多数いたように、戦争で夫や息子を亡くした女性は多数いたはずである。戦争中、お国のためと愛する者を送り出した女性の本当の心情を弥生子は理解していただろう。その哀しさを口に出して言えなかった女性のために、弥生子は反戦について作品の中で強く叫んだのかもしれない。

もう一つ、省三のように左翼運動に傾倒していった若者を昭和九年「若い甥について従妹へ―ある夫人に代つて―」に登場させている。これは副題にあるように弥生子の知り合いの女性の甥について、その女性の視点から描いている作品である。

甥の隆は社会運動に参加して投獄された。そのためそれまで隆に親しくしていた親類たちは急に避けるようになる。しかし山荘でひと夏過ごすうちに隆は元の活気を取り戻し始めるのである。

この中で弥生子は、運動から身を引いた後の青年の対処について女性の考えとして次のように述べている。

ほかになほ幾百人の隆が、学校にも帰られず、社会にも入れられず、親類にさへ白い眼で見られて、登り損ねた山の麓に幽霊のやうに蒼白くさまよひ歩ひてゐる

かを思ふと、あまりにも痛ましい時代の犠牲に胸がうづきます。

(中略)

人世の路は、決して一筋には限らないことを教えてやりさへすればよいのですもの。これは他の多くの青年たちに、その憂鬱を打破する生き方を見つけてやると同様に必要なことかと思ひます。

この随筆は昭和九年に発表されていることから、昭和七年「若い息子」が書かれた後、昭和一年「黒い行列」(迷路第一部)が書かれる前に書かれたとみられる。そこで引用のような考え方を述べていることは、この作品が「若い息子」から「迷路」への橋渡し役を担っていると考えられる。つまり「若い息子」で青年が運動へ入っていく過程を描き、この作品で転向後の青年たちの行く末について考え、「迷路」では転向後の行き方、憂鬱を打破する生き方を与え、それを描いているのである。これは日本ファシズムの台頭から崩壊という歴史を見て来た弥生子が、時代に即した作品を発表していった過程であると同時に、弥生子自身の考え方の変遷の過程とも取れるのではないだろうか。

「海神丸」^(註54)ではつきりモデルのある小説を書いて以来、モデルのことを忘れさせるくらい作品を書きたいと願っ

て来た弥生子であるが、「迷路」を執筆したときにはその力量がすでに備わっていると思われる。しかし、やはりモデルはないと自分の口から断らずにはいらなかった。何度もモデルを否定しているということは、弥生子にとってモデルを用いることが作家として恥ずかしいという思いを抱かせるものであったのかも知れない。しかし「迷路」は、自分の思想・夢を主人公に与え表現した作品である。設定にモデルを使い内容だけ創作することから、人物そのものまで自分自身が創作するところまで達しているのである。それにより他にモデルを求めたというより、自分自身の中で形成された人物であり自分自身を表現していると言えるだろう。そのことについて弥生子は昭和二五年「反戦者宗通」の章の附記^(註55)の中で次のように述べている。

「迷路」の全般にわたって、特定のモデルらしきものは一人もないことをお断りしておきたい。強めてモデル探しをすれば「ボワリー夫人は私だ」とフロロベルがいつた意味において、人物すべては作者自身と考へて頂きたい。

ここでは省三だけを弥生子の分身としてみてきたが、「迷路」の登場人物はすべて弥生子自身であったのかもし

れない。「迷路」は弥生子の作品の集大成であると同時に、弥生子の人生の集大成とも言えるだろう。

結論

これまで述べてきたように、野上弥生子は夏目漱石を師と仰ぎ、写生文から出発した作家であると言えよう。初期の作品は身の回りの事象や見聞を客観的に書き留めているだけで、私小説とも言えるものであった。しかし、『青鞥』への参加により、進歩的な社会運動に触れた。そして相次ぐ身内の死と自分自身の出産により、生と死について考えるようになった。表面的な出来事だけではなく人間の本質・内面性に目を向け始めたのである。そのことが作品の文体を変え、自分自身の文体・作風について模索し始める契機となる。

中期に入ると、自分の印象に残っていた出来事を大枠にして内容を自分なりに小説にすることに取り組む。初めのうちは、自分の周辺に起こった出来事を題材に書いているが、だんだんと社会性を含んだ作品を書くようになっていく。社会の変化とともに題材も変化を遂げているのである。自分自身が運動に参加することはなかったが、日本がどのような時期にあり、どのような問題を抱えているか、常に敏感に対応していた。その時代の問題点を主題とした作品

を発表していくのである。これは政治に深いかかわりをもつ家庭に育ち、幼いころから政治に対していつも関心があったことも一因であると思う。むしろこのように時代を考へること、変化していくことは弥生子にとっては自然なものであった。その変化、発展について昭和二九年「作家に聴く」の中で次のように述べている。

昭和三年からの「真知子」、その後の「若い息子」、戦後の「迷路」と、はじめのころのものとは作風も変わって行つたかもしれないが、わたしは、それぞれの時代の推移に従つて、いつもなにか考えなければならぬ問題があり、私としては自然な変化だった。

弥生子自身がその時代の問題について憂慮していたのであろう。だからその問題に対しての自分の考えや思いを作品中の人物に託して表現していったのではないだろうか。

弥生子は自分自身の目線で問題に取り組み、ものを書いていた。その目線は年齢とともに高くなっていったであろう。本論中では年齢についてほとんど触れていないが、この年齢も弥生子の文学の変化に大きな影響を与えたに違いない。若いころは作中の人物と同じ目線でものを見ていただろう。しかし年齢が進むにつれ、弥生子が作品中の人物

を見下ろすことができるのである。それゆえ、若い世代には描けない違う考えや思いを人物に与えることができたのではないだろうか。そのことについて漱石は、第二章の冒頭の「明暗」批評文で次のようにも述べている。

明暗は若き人の作物なり。篇中の人物と同じ位の平面に立つ人の作物なり。自ら高い處に居つて、上から見下ろして彼我をかき分けた様な作物にあらず。夫故に、同年輩以上の人の心を動かす能はず。大なる作者は、大なる眼と高き立脚地あり。篇中の人物は、赤も白も黒も、悉く掌を指すが如く雙眸に入る。明暗の作者は、人世のある色のはかは識別し得ざる若き人なり。才の足らざるにあらず、識の足らざるにあらず。思索、総合の哲學と、年が足らぬなり。

(中略)

「明暗」の作者はいまより十年後に至つて再び「明暗」をよむ時余の言の許りならざるを知るべし

二一歳で「明暗」を發表してから七一歳で「迷路」を書き終えるまでに五〇年経た弥生子は、まさに「思索、総合の哲学、歳」を得たのであろう。生や死についても考え、時代の問題に積極的に取り組み、歳を重ねていった結果、弥

生子独自の文学が生まれたといえる。

もし漱石が「迷路」を読むことができたなら、弥生子を「大なる作者」と称しただろうか。

註記

(註1) 当時発見されず、弥生子の死後昭和六三年一月二五日野上邸で発見された。同年『世界』四月号掲載

(註2) 明治四〇年二月一日発行『ホトトギス』第一〇巻第一五号掲載

(註3) 大正三年四月一日発行『青鞥』第四卷四号掲載

(註4) 大正五年一月一日付、大正五年三月一七日付(六一二回)『讀売新聞』連載(後に「小さい兄弟」と改題)

(註5) 大正五年四月一日発行『中央公論』第三一巻第四号掲載(後に改作のうえ「秘密」と改題)

(註6) 大正一一年九月一日発行『中央公論』第三七巻第一〇号掲載

(註7) 大正一二年九月一日発行『中央公論』第三八巻第一〇号掲載

(註8) 昭和三年八月一日、昭和五年五月一日発行『改造』

第一〇卷第八号、第二二卷第五号掲載、昭和五年

一二月一日発行『中央公論』第四五卷第一二号掲載

(註9) 昭和七年二月一日発行『中央公論』第四七卷第一三号掲載

(註10) 「黒い行列」(昭和十一年一月一日発行『中央公論』第五一卷第一号掲載)から「方船の人」

(昭和三十一年一〇月一日発行『世界』第一三〇号掲載)までを「迷路」とする。

(註11) 昭和十一年一月一日発行『中央公論』第五一卷第一号掲載

(註12) 昭和一六年一月一日発行『中央公論』第五六卷第一号掲載

(註13) 昭和一七年一月一日発行『中央公論』第五七卷第一号掲載

(註14) 昭和二〇年一月一日生活社刊

(註15) 昭和三七一年一月一日発行、昭和三八年九月一日発行(二一回)『中央公論』第七七卷第一号、第七八卷第九号連載

(註16) 昭和四七年五月一日発行、昭和五六年八月一日発行『新潮』第六九卷第五号、第七八卷第八号掲載

(註17) 註一に同じ

(註18) 註二に同じ

(註19) 昭和一〇年五月一日発行『文藝』第三卷第五号掲載

(註20) 昭和四六年一月一日発行『文芸春秋』第四九卷第一六号(臨時増刊『明治・大正・昭和日本の作家一〇〇人』)の中の「アンケート私が最も影響を受けた小説第一線作家八〇氏が回答」

(註21) 明治四〇年六月一日発行『ホトトギス』第一〇巻第九号掲載

(註22) 明治四〇年七月一日発行『中央公論』第二二巻第七号掲載

(註23) 明治四三年六月二五日発行『ホトトギス』第一三巻第一号(定期増刊第二冊)掲載

(註24) 明治四四年八月一日発行『ホトトギス』第一四巻第一三号掲載

(註25) 註三に同じ

(註26) 註四に同じ

(註27) 大正八年六月八日付、大正八年六月二九日付(二〇回)『大阪毎日新聞』(夕刊)掲載

(註28) 大正二年四月一日発行『婦人評論』第二巻第七号掲載

(註29) 註五に同じ

(註30) 昭和一〇年四月一日発行『主婦之友』第二九卷第四号掲載

(註31) 昭和二九年六月一〇日発行『文学』第二二卷第六号掲載

(註32) 註六に同じ

(註33) 昭和四年一月二五日刊岩波文庫『海神丸』掲載

(註34) 昭和三七年三月二七日付『朝日新聞』「わが小説」欄掲載

(註35) 昭和二年五月一日発行『改造』第九卷第五号掲載

(註36) 明治四二年一〇月一日発行『ホトトギス』第一三卷第一号掲載

(註37) 大正四年二月一日発行『反響』第一卷第九号掲載

(註38) 大正五年七月一日発行『文章世界』第一一巻第七号掲載

(註39) 註二八に同じ

(註40) 註八に同じ

(註41) 註九に同じ

(註42) 昭和八年五月一日発行『婦人公論』第一八巻第五号掲載

(註43) 註一〇に同じ

(註44) 註九に同じ

(註45) 大正一四年一月一日発行『改造』第七巻第一号掲載

載

(註46) 昭和五年二月一日発行『文芸春秋』第八巻第二号掲載

(註47) 昭和一〇年九月四日付、昭和一一年二月三日付

(二一回)『讀売新聞』連載

(註48) 昭和一五年七月一日発行『婦人之友』第三四巻第七号掲載

(註49) 昭和三九年二月二八日岩波書店刊『岩波講座日本

歴史』一三・月報二三掲載

(註50) 岩波書店刊『野上弥生子全集(第II期)』第一巻

月報一掲載

(註51) 註二四に同じ

(註52) 昭和二五年一〇月一日発行『世界』第五八号掲載

(註53) 昭和九年一二月一日発行『中央公論』第四九号第一三号掲載

(註54) 註六に同じ

(註55) 昭和二五年四月一日発行『世界』第五二号掲載
(後の「迷路」第三部の中の一章)

参考文献

『野上弥生子全集』(全二六巻)

昭和五五年、昭和五七年岩波書店刊

『野上弥生子全集』月報合本

昭和六〇年九月五日岩波書店刊

『野上弥生子全集』第II期

昭和六一年〳平成三年岩波書店刊

『新潮日本文学アルバム野上弥生子』

昭和六一年五月二五日新潮社刊

『鬼女山房記』野上弥生子著

昭和三九年八月二〇日岩波書店刊

『日本の長編小説』加賀乙彦著

昭和五一年一月五日筑摩書房刊

『野上弥生子の世界』瀬沼茂樹著

昭和五九年一月二〇日岩波書店刊

「野上弥生子―その特質―」（平田次三郎）

『国文学解釈と鑑賞』第二七卷第一〇号掲載

〈名作モデル考野上弥生子の『真知子』〉（神崎清）

『女性改造』第五卷第二号掲載

「野上彌生子論―現代の女傑とその周辺―」（大宅壮一）

『文芸春秋』第三五卷第一一号掲載

〈野上弥生子について―その作家的特徴と「真知子」の問

題〉

（津田孝）昭和五五年九月発行『民主文学』掲載